

# 城郭探訪

まちづくりと城の址

## 坂井市 丸岡城

### 現存天守をもつ古城と城下町 丸岡藩誕生400年を迎えて

坂井市長(福井県) 池田禎孝



#### 自然と歴史の魅力あふれる坂井市

坂井市は福井県の北部に位置し、平成18年(2006)に、三国、丸岡、春江、坂井の4町が合併して誕生しました。市内を流れる九頭竜川や竹田川などが合流して日本海に注がれ、東部には加越山地の一部の山々が連なり、中央には県内一の穀倉地帯・坂井平野が広がっています。

坂井市には、日本海が織りなす絶景の東尋坊や、かつて北前船の寄港地として繁栄し、日本遺産にも登録された三国湊の町並みをはじめ、魅力ある自然や歴史スポットがたくさんあります。令和6年に北陸新幹線が敦賀まで延伸し、さらに多くの方に来ていただく機会が増えました。

#### 丸岡城の築城と丸岡藩の成立

市の東に位置する丸岡城は、天正期に柴田勝家の甥・柴田勝豊によって築かれた城です。もともと東の山中に築いていた豊原

寺が、織田信長に焼き打ちされ、信長から豊原を与えられた勝豊が、平野の丘上に築きました。

何代かの城主を経て、慶長18年(1613)に丸岡城に入った本多成重は、結城秀康(徳川家康の次男)を祖とする越前松平家(福井藩)の家老として政治を主導し、大坂の陣

でも活躍しました。やがて幕府の処置で福井藩主が代わると、今からちょうど400年前の寛永元年(1624)に、成重は大名家として独立を認められ、丸岡藩が誕生しました。4代続いた本多家は、元禄8年(1695)にお家騒動により改易され、代わって有馬家が丸岡に入り、明治まで8代続いたのです。

なお丸岡藩領は、城下町やその周辺だけでなく、九頭竜川河口の滝谷や日本海沿岸の梶を含め、現在の坂井市域に点在して

広がっていました。

#### 丸岡城の現存天守とその城下町

丸岡城天守(国重要文化財)は、外観が2重、内部が3階の天守ですが、全国に12ある、江戸時代もしくはそれ以前に建てられた現存天守の一つで、北陸では唯一です。



「越前国丸岡城之絵図」(正保城絵図より)

(国立公文書館蔵)



丸岡城天守

また全国の中でも石瓦ぶきの現存天守は丸岡城のみです。昭和23年に丸岡町付近を震源地として起こった福井地震で、天守は倒壊しましたが、過去の修理記録などから、元の部材を再利用して再建され、文化財としての価値は変わらず保たれています。

調査の結果、現存する天守は、江戸時代の寛永期に造られたことがわかりました。天守の成立は、丸岡藩の誕生と関係が深いのです。

江戸時代には、本丸や二の丸の周りに五角形の内堀があり、さらにその周囲を外堀が巡っています。内堀は近代に埋められました。外堀の一部は、現在も川として形をとめています。

福井地震で大きな被害を受けた城下町ですが、現在も豊原や丸岡藩に関係する地名や寺院・神社などが残っています。かつて日向国延岡藩主であった有馬家が、延岡から楽人を

連れて来て奉納させたのが「日向神楽」で、現在は毎年9月に、長歌の八幡神社で奉納されています(県無形民俗文化財)。

### 生まれ変わる丸岡城周辺

坂井市では、丸岡城の周辺整備を始めたところ。丸岡城の歴史的、文化財的価値を高めながら、城を中心としたにぎわいの創出と周遊性の向上を目指していきます。

丸岡藩の象徴から、やがて「お天守」と呼ばれ愛されてきた丸岡城を、後世に受け継ぐためにも守っていきたく考えています。

## 歴史探訪コラム 城と都市の でんせつ

江口知秀  
建設産業図書館 学芸員

### 鬼作左

丸岡城の東北側に「一筆啓上石碑」が建てられている。これは徳川家康の重臣だった本多作左衛門重次が、妻に宛てて書いた「日本一短い手紙」を顕彰したものだ。その手紙の内容といえば「一筆啓上火の用心お仙泣かすな馬肥せ」と、なるほど短い。

文中の「お仙」とは、初代丸岡藩主・本多成重(幼名・仙千代)のことで、重次はその父であることから、ここに碑が建てられている。

さて、この本多作左衛門重次だが、「鬼作左」の異名をとったほど、気性の激しい人物で国中から恐れられていたという。一方、忠臣ぞろい(の三河武士団)の中でも、重次は「無二の忠臣」であったともいう。

その重次のすさまじいまでの胆力と、忠

臣ぶりをよく表す逸話が『寛政重修諸家譜』巻六八七に記されているので紹介したい。

ある時、徳川家と織田家の双方の家臣が争論に及んだ。なかなか決着がつかないで、織田信長は両家から代表者を出して、真っ赤に焼けた鉄棒を握らせると命じた。やけどの軽い方が勝ちだというのだ。

徳川の方からは重次が代表に選ばれ、伊賀八幡宮の神前にて鉄火を手にとったが、傷一つ負わなかった。こうして徳川家に軍配が上がると、家康はこの驚くべき結果に深く感じ入ったという。

さて、一方の織田信長はどう思ったのか。『寛政重修諸家譜』には何も記されていないが、歴史作家の隆慶一郎は、「気力横溢した者は奇蹟を起こすというが、合理主義者の織田信長はさぞ呆れかえったことだろう」と述べている。



丸岡城プロジェクションマッピング「ヒカリ結び」